

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Breastfeeding and risk of febrile seizures in infants: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル: 1歳までの熱性けいれん発症リスクと母乳栄養の関連性について(エコチル調査より)

ユニットセンター(UC)等名: 高知UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Brain and Development

年: 2019 月: 11 巻: 41 頁: 839-847

筆頭著者名: 満田直美

所属UC名: 高知UC

目的:

熱性けいれんは乳幼児期に好発する発熱に伴って起きるけいれんである。発症には遺伝的要因が大きく関連しているといわれているが、環境要因との関連性については不明な点が多い。本研究は環境要因のうち母乳栄養に注目し、母乳栄養を行った期間が1歳までの熱性けいれん発症リスクと関連するかどうかを検討した。

方法:

正期産、単胎を対象とし、母乳栄養を行った期間により対象を4群に分け、多重ロジスティック回帰分析により、母乳栄養期間が1か月未満であった群と他の群での熱性けいれん発症リスクに差があるかを検討した。同様に人工栄養と混合栄養、完全母乳栄養で発症リスクに差があるかも検討した。交絡因子には母親の年齢、妊娠中の喫煙、教育歴、世帯収入、母親のてんかん既往歴、同胞の有無、発熱の頻度、保育園通園の有無を含んだ。

結果:

対象となった84,082人のうち、1.2%が1歳までに熱性けいれんの診断をうけており熱性けいれんの有病率は母乳栄養期間が短いほど高かった。多変量解析では母乳栄養期間が1か月未満の群と比較し、母乳栄養期間が4から6か月、7から12か月の群ではそれぞれ、調整オッズ比0.65 (95% 信頼区間 0.42-0.99)、0.66 (0.45-0.96) と、熱性けいれん発症リスクが有意に低下していた。さらに生後6か月までの完全母乳栄養児は混合栄養児と比較して熱性けいれん発症リスクが低下していた。

考察:(研究の限界を含める)

乳児期の栄養方法と熱性けいれんには関連性があり、母乳栄養期間が長い児、完全母乳栄養児では熱性けいれん発症リスクが低下していることが示された。発熱の頻度や保育園通園の有無など、母乳栄養期間と熱性けいれん発症の両方に関連するであろう他の環境要因で調整後も、両者の関係性はほとんど変化しておらず、母乳栄養そのものが熱性けいれん発症リスクを低下させる可能性が示唆された。しかし、研究の限界として、今回用いた交絡因子以外の他の因子が結果に影響を与えている可能性は否定できないこと、また、熱性けいれんの家族歴についての情報がエコチル調査のデータからは得られず、調整ができていないことなどが挙げられる。

結論:

乳児期の栄養方法は熱性けいれん発症リスクと関連し、母乳栄養は熱性けいれん発症リスクを下げる可能性が示唆された。